

〔新刊紹介〕

入間田宣夫・小林真人・斉藤利男編

『北の内海世界 北奥羽・蝦夷ケ島と地域諸集団』

村井 章介

北海道高等学校日本史教育研究会は、毎年夏に講演会を軸とする研究会を開き、道内各地の高校で日本史を教えている先生方の交流の場としてきた。第二二回目を数える一九九八年は、函館で「北奥羽・蝦夷地世界の形成と地域諸集団」をテーマにシンポジウムが開かれた。本書はその記録をもとに編まれたもので、第一〇回および第二〇回の記念シンポジウムに基づいて同じ版元から刊行された、網野善彦他著『日本中世史像の再検討』（一九八八年）および大隅和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』（一九九七年）に続く三冊目の成果である。先の二冊が日本史のとらえ方全体にかかわるテーマだったのに対して、今回の本は北海道という地域性に根づいた問題関心に支えられている。といっても、けっして単純な「地元指向」の産物ではない。「北の内海世界」ということは、津軽海峡水域で結ばれた北東北と道南を一つの地域として把握しようとする指向の表現である。在来のステロタイプ化した地域認識への批判をもくろんでおり、その視線は北海道をも超えて、サハリンや北アジアにまで及んでいる。日本史研究・教育の最先端における議論にふれることができる、知的刺激にみちた一冊となっている。

斉藤利男「北緯四〇度以北の十〜十二世紀」は、近年における考古学

の研究成果を充分に咀嚼しつつ、一〇〜一二世紀、国郡制施行の限界線である「北緯四〇度」から道南にかけて特徴的に分布する「防衛性集落」から、ひとつの地域性を論証しようとする。それは「日本国」など外の勢力に対する防衛を目的とするものではなく、集落間の抗争で特徴づけられる「戦争の時代」の産物だという。エミシからエゾへの呼称変化、擦文化から初期アイヌ文化への移行という重大な変化を理解するための筋道が示されている。これに対して小口雅史「防衛性集落の時代をどうみるか」は、同集落を日本の辺境軍事貴族との緊張が生んだものだという理解を対置する。

入間田宣夫「糠部・閉伊・夷が島の海民集団と諸大名」は、北東北の太平洋側に発する勢力が「内海世界」に及ぼした影響の大きさを強調する。その観点から、一五世紀なかばにあらわれた「南部の平和」と呼ぶべき状況を軸に、地域の諸動向を―アイヌ民族の蜂起もふくめて―理解すべきだとする。似た観点は小林真人「北海道の戦国時代と中世アイヌ民族の社会と文化」にも見られる。小林は、中世後期のほとんど唯一の文献史料である『新羅之記録』の批判を通じて、館主たちの抗争を通じて蠣崎氏の覇権が達成されていく過程で、交易活動で館主との依存関係を深めていたアイヌ民族もそれに関わらざるをえなかった、という見方を示す。いずれも、アイヌ対和人の民族戦争という視角でコシヤマインの戦い以降の経緯を見てきた通説への批判である。これに対して、菅田慶信「蝦夷・北奥と本願寺教団」と佐々木馨「みちのく」像の光と影―その宗教史的アプローチ―は、蝦夷地への仏教の展開に視点をずえるならば、「日本」という国家との対峙や民族対立という観点がいぜん有

効だと批判する。

以上の六論文がシンポジウム当日の報告およびコメントを文章化したものである。本書ではこれに加えて、中村和之「北の「倭寇的状况」とその拡大」が、「内海世界」から北へ沿海州にかけて拡がる空間のなかで、骨嵬(アイヌ)や吉里迷(ギリヤーク)その他の集団が、元・明・日本などの国家と接触しつつ織りなす「倭寇的状况」を描く。最後に長谷巖が「討論のまとめ」を行い、相庭達也が斉藤・入間田・小林三報告の内容を授業化したプランを提示する。

シンポジウムの記録という性格上、歴史理解が論者によって異なることは避けられない。編者の斉藤自身、「アイヌ民族」と「和人」の関係をめぐって、民族対立の重さを強調する斉藤・蒼田・佐々木と、民族の未分化で流動的な状況を強調する入間田・小林・中村とのあいだに、大きな違いのあることを自覚している(「はじめに」)。

しかし、急速に論点が多様化し深まっている分野だけに、共通理解を確実に積み上げていくことも必要だろう。たとえば、一三世紀後半から鎌倉時代末期にかけて、安藤氏の内紛が「蝦夷蜂起」を伴いながら激化する。私などはこの事件を擦文文化の終焉と関連づけて理解していたのだが、最近では擦文の終焉をもっと早い時期に求めるのが多数説らしい。とすれば、この事件の評価も変わってくるはずだが、本書では、斉藤・入間田両論文のちやうど端境に入ってしまったためか、まったく言及されていない。

(山川出版社 B6判 二二六頁 一九〇〇円 一九九九年七月刊)

(むらい・しょうすけ 東京大学大学院人文社会科学系研究科教授)